

公益財団法人
荒川区芸術文化振興財団
Arakawa City
Art Culture Promotion Foundation

▶ リンク集

文字サイズ

小

中

大

No.96 浅沼 ひろゆき(あさぬまひろゆき)

トップ > 荒川の人 > No.96

「お金ほしい…」みごと大賞

生粋の荒川っ子“四コマ”のホープ

都電に近い東尾久の待ち合わせ場所に現れたのは、短い髪に細いメタルフレームをかけた、ちょっとシャイな感じの好青年。三十一歳の若さですが、四コマ漫画のホープとして、雑誌に新聞に引っ張りだこの人気です。この日も、すぐ近くにある仕事場から抜け出してきてくれました。

「生まれは東尾久ですが、実家がすぐ西尾久に引っ越して、育ちはずっとそこでした。結婚して今住んでいる家も西尾久。実家、自宅、仕事場がそれぞれ停留所一つ分くらいしか離れてはいないんですよ」

生粋の荒川っ子のように。そんなに住みやすい？

「この辺はビルも建たないし、昔からの商店街もそのままだし、子供のころからあまり変化がないんです。渋谷のような都会は嫌だし、田舎はもっといやです。こういう東京の下町みたいところが一番住みやすいかな」

浅沼さんの代表作は、いたずらっ子で、ませた下町の小学生を主人公にした「三丁目のまさる」シリーズ。四コマ漫画雑誌「まんが笑ルーム」（少年画報社）で、もう十年も続いている人気連載です。

「タイトルの由来は、実家が西尾久三丁目にあったので。まさるの世界は、僕の育った昔の西尾久のイメージね」

子供のころは、まさるのような面白かった？

「いえ、漫画を描くのが好きな、普通の小学生でした（笑）。むしろ、中学、高校生になってからかな、勉強しなくなったのは……。バイト三昧で、高校二年生の時、学校をやめて、千代田工科芸術専門学校の漫画科に入ったんです。ただ、その時は漫画家になれるとは本気で思ってなかった。もう夢よりも現実を考える年齢でしたから」

今さらサラリーマンにはなりたくないし……。と悩んだあげく、浅沼さんが面接を受けたのが、何と「ホストクラブ」。このあたり、いかにも現代青年的と言えるかもしれません。

ところが、その面接で「白いプレザーは店で貸すけれど、靴とワイシャツとズボンは自分でそろえてくれ」と言われて大弱り。「何せ、そのころは家賃一万円の、共同便所のアパートに住んでいたんですよ余分なお金なんて持っていません」

そこで、浅沼さんが狙ったのが、四コマ漫画新人賞の賞金でした。「それまで四コマ漫画を描いたことなかったんですが、四コマなら楽だし、応募ページ数も少ないと思ったんです。図々しいですよ」

しかし人生は分らないもの。お金欲しさで応募した「少年と二ワトリ」が、見事、少年画報社の「第七回谷岡ヤスジ賞」大賞に輝きます。

賞金十万円は手に入りましたが、もうホストクラブはどこへやら、仕事の注文が殺到して「いつの間にかプロ漫画家になってました」。この時二十一歳。まさに、漫画のようなデビュー劇でした。

現在、四コマ連載を、夕刊紙二紙を含み、七本を持つ売れっ子。「量産がきかないので、同じ数くらい仕事をお断りしているんです」と申し訳なさそう。妻のひろみさんもベタ塗りやカラーを手伝い、「家族ぐるみ状態」で頑張っているそうです。

昔から変わらぬ西尾久も、「駄菓子屋と銭湯は減ったかな……」とぼつり。

「すもものお菓子って知ってますか。汁が真っ赤で、凍らせてシャリシャリ食べるんです。親には『体に悪い』と随分言われましたが、実はおとといも買ったんですよ」

一瞬、丸坊主で下町を駆け抜ける「まさる」のような少年の顔がのぞきました。

読売新聞記者・石田 汗太

カメラ・岡田 元章

